

特別講座⑤

電通Bチーム クリエーティブ  
キリーロバ・ナージャ氏



私はロシアに生まれ、父の仕事に合わせてロシア、イギリス、フランス、アメリカ、カナダ、日本の6カ国で教育を受けました。学校に通いはじめる年齢、持っていくカバンとその中身、教室での机の並べ方に至るまで国により違います。どの国がベストということではなく、違いを知ることこそが強みになると思います。

特別講座⑥

建築家  
隈 研吾氏



日本的な建築家といわれるが自分ではそう思わない。私は戦後第4世代。バブルがはじけて地方へ行った。そこで職人と対話し、場所に合わせた素材や技を使いはじめた。職人との仕事は、私の場合は常にチャレンジ。日本的感性は自分を相手に押し付けることではなく、相手に合わせて物事を進める姿勢だと思う。

特別講座⑦

加賀屋 代表取締役社長  
小田 與之彦氏



「笑顔で気働き」を原点に創業以来、当たり前のことを当たり前にすることを大切にしてきた。「プロが選ぶ日本のホテル・旅館百選」の総合1位を長年キープしてきたが2016年に陥落。これを機にサービスを見直す大改革を敢行。お客さまの人生の大切な1ページを演出するサポートが加賀屋の存在意義だと感じている。

特別講座⑧

工業デザイナー  
奥山 清行氏



これからの100年をデザインするには、「WANTS」、「団体力」、「論議力」、「クリエイティブ力」、「現場力」が必要だ。私の仕事は製品のスタイリングだけにとどまらず、会社の仕組みそのものに手を加えることも多い。製造業はサービス業。モノづくりを超えて、モノを通じていかにお客さまに喜びをもたらすかが問われる。

特別講座①

スマイルズ代表取締役社長  
遠山 正道氏



スマイルズでは「誰が何をやるか？」という個人の情熱を大切にしています。大人の都合が優先されがちなビジネスの世界で、子どものまなざしに根ざした動機こそが世の中を変えようと思うから。分母の小さな事業の仕掛けはリスクが少なく、思い切れる。個人のひらめきやセンス、情熱が仕事と人生に重なっていきます。

特別講座②

小西美術工芸社 代表取締役社長  
デービッド アトキンソン氏



日本の強みは人口の多さと人材の質の高さだ。この相乗効果が高度経済成長や国民総生産のランクを支えてきた。しかし、これは表面的な強みでしかない。人口減少により人口の強みは弱みに変わるため生産性を上げることが急務。経営者は人材を正当に評価し、付加価値を膨らませる仕組みへ経営のシフトが求められます。

特別講座③

トヨタ自動車 先行開発推進部 主査  
井戸 大介氏



近年、日本独自の価値や美意識を世界価値に昇華した商品がない。かつて車は「愛車」と呼ばれた。現状を変える試みが、AIや自動運転などの新技術と車を組み合わせた「Concept-愛」だ。日本人の多くがロボットに親しみを感じるように、AIを搭載して心をもつ車と人が時を共有する友となることを期待しています。

特別講座④

書家／アーティスト  
紫舟氏



世界に目を向けずにこれからの時代は生き抜けません。書を世界に通用させることは困難でした。筆を重ねて絵画を仕上げる西洋では一瞬で完成するものはアートと認められない。だから書を立体にした。私の発想の公式は(A-1)×Bで、Aを構成する最も大切なものを引き、何かをかけることで新しいものが生まれる。

豪華講師陣による3日間の白熱授業



日経 Discover Japan アカデミー

# 伝統の最先端・日本橋から 日本の未来が動き出す!

日本の魅力や価値観を各界のトップクリエイターから学び、自らのアイデアとして発信する「日経Discover Japan アカデミー in 日本橋」が2018年秋、開催された。熱い想いがぶつかった会場をレポート!

文=森 聖加 写真=工藤裕之 text: Seika Mori photo: Hiroyuki Kudoh

トークセッション①

陶芸家 / 十四代中里太郎右衛門氏



唐津焼の名工は古唐津を復興させた祖父とも、現代的装飾で新風を起こした父とも異なる作陶を続けてきた。「伝統とは革新であり、時代の先端をつくるのが自分の役割」と語る。唐津の「つくり手八分、使い手二分」は、窯出し時点ではまだ八分で、二分の余白が残るという考え。使い手に育まれ、わざわざ買戻した茶碗を披露してくれた。

トークセッション②

鵜工舎棟梁 / 小川 三夫氏



「最後の宮大工」と称された西岡常一氏の内弟子となり、法輪寺、薬師寺金堂、薬師寺西塔再建などで副棟梁として活躍。「木は生育の方位のままに使え、というのが師匠の言葉だが人も同様に適材適所がある」と小川氏。この日は鉋掛けも実演し、透けるほどの削り屑の薄さに一同驚愕! 手に持ったのは宮大工が使う鉋鉋(やりがんな)。

参加企業は全11チーム

- トヨタ・リサーチ・インスティテュート・アドバンスド・デベロップメント
- 丸紅
- キノファーマ
- 羽田未来総合研究所
- にんべん
- ニューバランスジャパン
- キリンビバレッジ
- オリエンタルランド
- 日本たばこ産業
- 高島屋
- ポーラ・オルビスホールディングス

順不同

日経Discover Japan アカデミー

開催日程: 第1回10月10日(水)、第2回10月24日(水)、第3回11月14日(水)、第4回11月28日(水)  
会場: harappa 日本橋  
主催: 日本経済新聞社  
特別協力: 三井不動産

「日本の魅力、再発見」をテーマにいまに息づく日本独自の文化や価値観を伝えてきた小誌「Discover Japan」。2018年の秋、4回にわたって行われたアカデミーは、日本らしい感性と価値観を学びながら、自社の新製品やサービスの開発に生かすことを目的に、日本経済新聞社主催、三井不動産特別協力という強力な布陣で開催されたスペシャルな企画だ。

アカデミーが開催されたのは東京・日本橋。江戸の昔から交通の要衝としてヒト、モノ、カネが集まり、情報を全国に発信してきた場所だ。江戸から続く老舗も多い。街の歴史性とながらながら、日本らしさを盛り込んだ新しい価値を創造し、未来へつなげる。そうした目的もアカデミーにはある。

参加企業は多数の応募から右ページ掲載の11社が選ばれた。特別講座には書道家、工業デザイナー、建築家など、世界的に活躍する各界のトップクリエイターが登壇(上の表参照)。彼らの生の声に耳を傾け、直接対話する時間も設けられた。陶芸家や寺社建築を手掛ける宮大工の棟梁ら職人と小誌統括編集長とのトークセッションでは、宮大工が古くから使ってきた鉋鉋の実演も行われ、スゴ技を目の当たりにした参加者のボルテージが一気に高揚する一幕も。



「Discover Japan」で連載中の「ニッポンの極意採集」

日本の伝統の裏側に息づく哲学は、時代を超え、現代に生きる私たちをインスパイアする。21世紀に活用可能な日本古来の極意を探しに電通Bチームが出掛ける連載



電通Bチーム 代表 倉成英俊氏

ワークショップ

Japan Conceptを現代に応用するには？

倉成さんが代表を務める「電通Bチーム」は、本業=A面以外に個人的な得意分野=B面をもって活動する社員が集まって、いままでとは異なる方法「PlanB」を提案するチームだ。好奇心第一に時代の閉塞感の打破に挑む。「たとえばウエストバッグをヒップバッグと名前を変えるだけで新しいトレンドとなります。また多ジャンルの仲間を集めてプレストする、新しい発想法も提供しています」。日本古来のコンセプトを採集して現代のアイデアづくりに生かすこともそのひとつ。「情緒が優位にある現代において、考える力こそが武器です」

最後は模擬々社長プレゼンでアイデアを共有



「社長！」という語りかけで発表を行った日本たばこ産業。各チーム、ドラマ形式を探り入れたり、和装のアピールのため自ら着物を着たりと趣向を凝らしたプレゼンで競った



「スマイルズでGO!を出したくなる目線で審査をしたい」と語る遠山氏。経営者としての厳しいまなざしで見つめる



審査員からは、より具体的なイメージや予算調達の方法など、実現の可能性をリアルに問う質問が次々と投げられた

日本の“極意”から導き出された新規事業を発表

- トヨタ・リサーチ・インスティテュート・アドバンスト・デベロップメント／「コンシェルジュ・みゆき」
- 丸紅／「日本橋発和装ルネッサンス 和装によるおもてなし創出プロジェクト」
- キノファーマ／「子宮頸がんと子宮頸部上皮内腫瘍による“涙をゼロにするプロジェクト」
- 羽田未来総合研究所／「隠れみつけ(MIKKE!!!)」
- にんべん／「鯉節に季節の薫りを織り込む」
- ニューバランスジャパン／「インソールソックス」
- 麒麟ビバレッジ／「VEGE TO GO」
- オリエンタルランド／「“雨の日ディズニー”で心に虹を♪」
- 日本たばこ産業／「空き家を利用した共創公園 CO-EN」
- 高島屋／「～滞在できる百貨店～日本橋ホテル」
- ポーラ・オルビスホールディングス／「MUSEUM for KIDS」

3チームが表彰されました

審査員特別賞

ニューバランスジャパン



「日本人の9割が0脚で4人に1人は外反母趾と足に不調を抱えています。創業110年の会社が下駄とソックスという日本発のスタイルで、ファッション業界に旋風を巻き起こしたいと思います」

ビジネス賞

麒麟ビバレッジ



「VEGE TO GO」というテーマで一般には廃棄される規格外の野菜を燻す案で受賞。「講座により、柔軟な思考が得られました。四季折々の風情を楽しむ食文化の国であることを従来にない発想で表現していきたいです」

Discover賞

にんべん



春＝桜や夏＝緑茶といった季節の薫りで鯉節を燻す案で受賞。「講座により、柔軟な思考が得られました。四季折々の風情を楽しむ食文化の国であることを従来にない発想で表現していきたいです」

講座の背景にある想い

コンサルタント・事業開発プロデューサー 池嶋徳佳氏

日本は世界に誇る文化、価値観をもっているが、実は日本人自身がきちんと理解していない。日本を深く知ることが、自社の企業活動に新しい視点を与えると信じ、今回の企画を実現した



Discover Japan統括編集長 高橋俊宏氏

これまで小誌が取り上げてきた日本の魅力や職人の技のすばらしさを読者に直接体験してもらおうという夢が実現し、感無量だ。日本の価値を再認識し、事業発展のために今後も役立ててほしい



中間発表でアイデアをプレゼン

1日目に学んだコンセプト「つくり手八分、使い手二分」、「四十八茶百鼠」、「四方正面」、「舌頭千転」、「見立て」。「これを現代に応用するとどんなことが考えられるか」という題目で発表が行われた。オリエンタルランドは、他部署の人間になり切り、発言する「見立て会議」を提案。ユニークな発表が続いた。

現代に応用可能な日本古来のコンセプト

プログラムでは特別講座のほかに、ファンリテーターである電通Bチーム代表の倉成英俊氏による「Discover Japan Concept」と題した、「オリエンテーションとワークショップの時間も設けられた。そもそもアカデミー開催のきっかけとなったのが、電通Bチームが手掛ける小誌連載「ニッポンの極意採集」。和菓子職人、染物師といった人々を取材し、現代に応用可能な日本古来のコンセプト（＝極意）を採集する企画だ。

倉成氏は、「アイデア×情報×情報」だといひ、オリエンテーションでは、トークセッションにも登場した唐津焼の十四代中里太郎右衛門さんの「つくり手八分、使い手二分」という考え方や、江戸の奢侈禁止令の中で発展し、江戸の染物職人が試行錯誤の上に生み出したグレーや茶のバリエーション「四十八茶百鼠」などを紹介。日本人ならではの微妙な差異を感じ取る感性や、発想の豊かさを仕事へと応用するヒントを与えた。アカデミーの特徴は発想のヒントを聞いて終わりとはしないところ。ワークショップではいわば中間報告として、各チームがプログラムを通じて学んだ極意を現代に応用するプレゼンテーションを実施。即アウトプットさせる実践型の講義でもあった。

目が開かれるアイデア続々 各社が競う最終プレゼン

第4回の最終日は各チームによる総仕上げのプレゼンテーション。テーマは「日本人固有の感性・価値観を生かして、あなたの会社の社長に新商品または新規事業の提案をする」というものだ。世の中を変える新企画を社長に模擬プレゼンする仕掛けで、ビジネスアイデアを共有し、学びの成果を確認した。優れたアイデアには表彰もあり、各チーム発表に熱が込められた。

3賞が用意され、そのうち「Discover賞」を受賞したのは、日本橋に本社を構えるにんべんだ。同社の代表製品は鯉節で、味や香りを変えずに高い品質をキープすることが製品づくりの基本。本プレゼンではその真逆を行く、鯉節に季節の薫りを燻して織り込む新製品を発表。試作も持ち込む力の入れようだった。

「審査員特別賞」のニューバランスジャパンは、同社のオリジナルである矯正靴をベースに、「つくり手八分、使い手二分」の考え方を応用。人が履くことで足の変形が矯正される足袋にも似たインソールソックスという伝統×新機軸のフットウェアを提案した。ほかに多彩な業種が集うアカデミーならではのアイデアが展開され、審査員全員が実現を待望。閉幕後の懇親会では未来へつながる交流の輪が広がった。